

漢詩神奈川

第 22 号

神奈川漢詩連盟
事務局

神奈川県海老名市
浜田町16-9

TEL-FAX
046-233-7641

発行人 三村公二
編集人 高津有二

連盟外への発信を増やしていこう！

神奈川漢詩連盟会長 三村公二

三月十七日の創立十周年記念漢詩大会は中華街とのコラボも成果をあげて無事に終わり、六月二十一日の総会で、「この際、連盟の運営は全て若手にゆだねたい」という岡崎前会長、(故)田原副会長のご意向を受けて新体制がスタートし、新しい若い方々にも執行理事、運営委員として参画していただいでやがて半年になる。

現在神漢連で実施されている定常的な催しをあらためて見直してみると、霧笛女子会を含む鑑賞会・勉強会が五つ、吟行会・研修会・サークル交流会(バトル甲子園)・初心者入門講座がそれぞれ年に一度、更には十三の各サークルの勉強会・各サークルが独自に行う行事、年に一度の理事会・総会、毎月の運営委員会、これに年二回の会報の発行、神漢連

叢書の発刊、ホームページ(H.P.)の更新を加えると、カレンダーが真っ黒になって隙間がないほど実には盛りだくさんである。少し手を広げ過ぎではないかとの感が無きにもあらずであるが、HPからの情報提供、初心者入門講座と一部のサークルの外部団体とのコラボを除くとそのほとんどが連盟内の行事に留まっただけで、連盟外部に発信している案件は極めて少ない事が分かる。

連盟のモットー「漢詩を学ぶ、漢詩で遊ぶ」の「漢詩で遊ぶ」の真の狙いは、連盟外の方々とも一緒になって漢詩で遊ぶことによって、今まで漢詩に馴染みがなかった方々に漢詩に興味を持っていただくようにしていく事にある。今の漢詩界にとって漢詩再興の大きなうねりを生み出して愛好家の底辺を広げていく事は何よりも重要な課題であるから、神漢連の目指すべき一つの方向は、「金河様式」を連盟内だけに留め置かず、もっと積極的に連盟の外

に向かつて発信していく事ではなからうか。このような観点から、今年度から「PC(パソコン)漢詩の会」と「中国文学が専門の大学の先生方による公開の講演会」をスタートさせた。PC漢詩は「AI漢詩」という観点もあるが、若い人達が漢詩に取り組みやすいようにPC・スマホのみで漢詩が作れるようにしたいという願いから、検討会を発足させたものである。又、漢詩に興味を持つ人を増やしていきたいという狙いから、十二月六日に、その第一回として、中国文学が専門で且つご自身でも漢詩を作られる明海大学名誉教授の市川桃子先生に「蓮の花の運命」と題してのご講演をお願いした。ご講演は会員以外の方々にも開放したので、多くの人が参加して盛況であった。

一方、連盟内部の課題として、個々の会員の詩力の向上を目的とした施策を強化・充実させていく事を忘れてはならない。詩力向上はあくまでも個人の努力に関わる問題であるから、連盟としてはそれをサポートする内容の充実した適切な勉強の場を提供していくという事になる。鑑賞会Bが「聯珠詩格の実作を伴う勉強会」として再スタートした事がその好例であろう。今後、神漢連から全日本漢詩大会等で特別賞を受賞する若い人達が次々と出てくる事をもう一つの目標としていきたい。「漢詩を学ぶ」の究極の目的は、皆に感動を与える良い詩を作ることにあると考え



連盟の行事

十一期初心者入門講座と 同サークルの発足

初心者入門講座(十一期生集う)

今年の初心者入門講座は七〜八月の真夏の時期に開催された。例年は四月に行われるが、今年度は漢詩連盟の十周年に当たり、行事・イベントがあつたためである。この影響で応募者が十二名と少なかつた。(昨年は五十名で締め切り)応募に当たっては「漢詩の鑑賞と実作」と銘打って新聞広告・ホームページで宣伝したが、応募者は全員実作の希望者で、これは予想外であつた。

八月三十日に五回の講習が終了、サークルを結成して、十名が参加することになった。サークルに残る生徒の割合は例年、半分であるから、今回は好成績と言えるでしょう。これは寺子屋指導が先生一名に生徒二名と濃密であつたことも幸いしたと思われまふ。そして卒業詩の出来栄が全員が高いレベルなので、これからが楽しみです。

サークルの世話人は篠崎吉之さん、川久保普美子さん、佐藤浩史さんが担当します。講師は中島、飯島です。

(中島龍一)

初心者講座に参加して

詩林会 川久保普美子

漢詩訓読の語調が耳に心地よく、字数少なくして的確な表現が好ましく漢詩の鑑賞に親しんできました。

随分前どここの主催か忘れてましたが、詩作の一日講習に参加させていただいたことがあります。「だれ漢」から詩句を並べ立てるなやま詩なるものを作り、山盛りの添削を受けて意気消沈。何百年も前の中国の音韻ゆえの決め事等、我関せずと居直りの体。されどどこか未練…。

そんな折、当連盟の初心者講座を通じて漢詩作詩の世界に再度触れる機会を頂きました。きめ細かなご指導のもと、何とか卒業詩一首。中々頭が漢詩実作モードに切り替わらず悪戦苦闘致しました。私の場合はまだ少し一句作りを丹念に学ぶ時間が必要だったかなと思います。

「漢詩狂い? 日本第一の…」と評される、諸先生諸先輩方の溢れるパワーのもとで、十一期生のお仲間を得た事に感謝しつつ二度目の挫折なきよう、少し学び大いに遊ん



で参りたいと思います。宜しくご指導お願い申し上げます。

十一期の会発足

―「詩林会」と命名―

詩林会代表 篠崎吉之

平成二十九年度初心者入門講座修了の第十一期生サークル「詩林会」が発足しました。今年度の入門講座は、神漢連創立十周年記念式典が挙行されたことで、例年よりも開催時期が遅く、サークルの発足も遅れていましたが、十二月十三日、第一回定例会を開催し、ようやくサークル活動をスタートすることができました。

「詩林会」は中島龍一先生・飯島敏雄先生に指導・助言を仰ぎ、また、参加人数は十名(男六名・女四名)のサークルです。

名称の「詩林会」は、漢「詩」の仲間が多く集まっている所(「林」)を意味しています。

サークルの名称が決まり、活動もスタートしましたが、まだまだ初心者ばかりの「詩林会」です。

今後は両先生の下、「詩林会」の名に恥じないよう、作詩力の向上と漢詩の知識の習得に努めるとともに、神漢連の各先輩サークルに一日でも早く追いつくため、研鑽を積んで参ります。

神漢連会員の皆様には、「詩林会」への叱咤激励をどうぞよろしくお願いいたします。

記念艦「三笠」吟行会

―初心者も柏梁体にチャレンジ―

平成二十九年九月二十七日、初秋の気配漂う横須賀市の三笠公園で、記念艦「三笠」を見学し、恒例の吟行会が行われた。日露戦争での足跡を、ビデオ、保存会の関係者の解説と併せ、つぶさに見学。二十八名の参加者での懇親会、柏梁体披露では、石川先生の鮮やかな全句配列と懇切かつ諧謔溢れるご批評に加え、「全体に上々の出来栄」との講評をいただきました。参加者全員の自作コメントもあり、楽しくも有意義な研鑽の時を過ごし、盛会裏に次回再会を約した。
(新井治仁)



神漢連 第十三回吟行会 柏梁体

(東・冬韻) ◎優秀句 ◎優良句

- ◎ 暑威未散坐涼風 三上光敏
- 迢迢天宇四望楓 志村典子
- 吟行三笠興趣中 室橋幸子
- 三笠回頭戰史豊 新井治仁
- ◎ 三笠今猶天下工 三村公二
- ◎ 戰艦百年誇偉容 高津有二
- 菊花御紋艦首東 上田尤子
- 闘艦保存機運允 飯島敏雄
- 海戰艦旗三笠虹 坂上貞夫
- 三笠艦橋旭日紅 岡田泰男
- 乘艦見上巨砲筒 山口幸雄
- ◎ 東郷元帥譽望隆 水城まゆみ
- 対馬洋上耐嚴冬 谷川勝利
- 旗邊敵彈加飛龍 柴田 洋
- 総員起床時点鐘 城田六郎
- ◎ 取舵一杯火砲攻 池上一利
- ◎ 艦上戰傷伏見宮 中島龍一
- 戰勝旗艦列相從 桜庭慎吾
- 艦旗高揚武威雄 大森冽子
- 海戰戰果金銀銅 石川忠久
- 艦旗揚條如半弓 住田笛雄
- 碧水洋洋萬里通 長岡巨知
- ◎ 智將得佐元帥功 細江利昭
- ◎ 元帥墨書色尚濃 瀧川智志
- 母性涙沾問村童 村上良明
- 驚世功名秋影空 柴本信子
- ◎ 詩朋高会喜未終 川上修己

吟行会に参加して

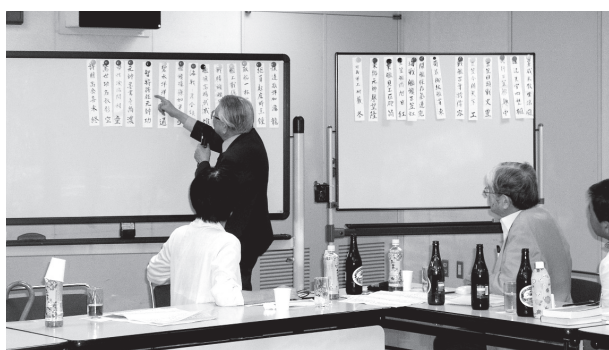
十期会 細江利昭

本年の吟行会は、横須賀市の三笠公園で行われ、戦艦三笠を見学し、出席者各自が三笠や日露戦争にまつわる「柏梁体」の七言一句を作りました。

今回は、得た韻字は「功」でした。「しめた。」という感じで、瞬間的に「將軍功」で下の句は終わり。上の句を、秋山真之にしようとして、「知將」にし、下の句を「元帥功」に変更し、「知將得佐元帥功」として提出しました。支離滅裂かと思いきや、石川先生に○を戴きました。

出来不出来はともかく、作るのに慣れてきたという感じがあり、高津、川上両先生の指導の賜であると思っております。「柏梁体」と言うと、難しそうに思えますが、平仄不問ですし、先生、先輩のアドバイスもいただけます。気軽に参加すると良いと思います。

その後、石川先生が、提出された句を順序よく並べられて、それを物語にして面白く説明されました。楽しい一日でした。



石川先生のご講評

研修会

―初心者も上級者も活発に討議―

恒例の研修会が近代文学館において、十一月八日、十四日の二回にわたり行われた。参加者はそれぞれ十五名で活発な討論がなされました。

作者の名前を伏せた自由詩に、投票をしたうえで得点を集計して順位を決め、討論をおこない、最後に作者の名前を明らかにして、作者の意見を聞いて再び議論を深めました。一組の一位は横溝比呂美さんで九票、二組は三村会長で十一票でした。

得票の多い人、少なかったが敢闘賞など役員を外して三村会長から賞品(漢詩の本)を渡されました。以下に優秀作品を紹介します。(中島龍一)

秋日寫懷

秋日懷を写す

横溝比呂美

霜染風林秋色誇

霜は風林を染めて 秋色誇り

一江景物借蘆花

一江の景物 蘆花を借る

釣童歸路斜陽裏

釣童 歸路 斜陽の裏

形影相依野徑餘

形影 相依り 野徑餘なり

家の近くの川辺は、子供達の恰好の遊び場だった。遙か上流は溪流釣が盛んで、そのおこぼれの山女魚や鮎を釣りたいと競って釣り糸を垂れていた。日が傾き始めると母親の声

が聞こえたかのように家路につく。夕日に色濃く染まった影と寄り添い、野道を帰って行くのだった。閑かになった河原は蘆の葉擦れがさらさらと清らかな流れのような音をたてていた。

忘れてしまいそうな私の心象風景を紙に写したいと考えた。不備な箇所も多々在ろうが思いがけなく一等賞を戴いた。感謝。感謝。

高秋采松草

高秋松草を采る

松本征儀

老宿朝來巡圃園

老宿朝來 圃園を巡り

収藏尤物不勝繁

尤物の収藏 繁に勝えず

庭前賈客競同列

庭前の賈客 同列を競う

分別芳香滿竹門

分別芳香 竹門に満つ

研修会は、活発な意見が出て、有意義な中の濃い場となった。要点を以下に纏めた。

◎詩題と詩の内容対応が不十分。これは、売炭翁などの例を参考にして練りなおしたい。

◎起句の圃園は、より適切な詩語を択ぶか、表現を変える。

◎轉句の競同列は、分かり難い。対案として、競拍賣を検討したい。

◎結句中の分別は、仕訳の意で使ったが、分類などの類語も検討したい。

漢詩鑑賞会B「聯珠詩格」に挑戦

漢詩鑑賞会Bは住田笛雄先生のもと、「唐詩選」の七言絶句の「唐詩選画本」くずし字(変体仮名)の読み解きと同時に詩の解釈を行い、昨年春にその鑑賞を終えた。

これに引き続き新たに住田先生のもと、「聯珠詩格」の勉強とこれに伴う作詩も行うという二本立てで開始した。テキストはタイムリーに発刊された「近畿漢詩連盟叢書 大野修作校閲 唐宋箋注「聯珠詩格」第一冊を用い、これに従って会を進めている。この本は第四冊まで発刊が予定されており現在第二冊まで刊行されている。参考書は岩波文庫(黄版)訳注「聯珠詩格」柏木如亭著、揖斐高校注を用いている。残念ながらこの本は絶版のようである。

勉強会は昨年五月より第四金曜日の午後、相鉄線の二俣川駅の近くの神奈川県立公文書館の国会議室で行っている。参加者は二十七名(発足当時)、講師は住田先生をはじめとして、水城まゆみ、池上一利、川上修己の三名が交代制で行っている。

テキストの初頭は◆四句全对格から始まっており、先ずは杜工部(杜甫)の漫興の詩他二首に続いて◆起連平仄对の格と对句の連続である。これらを鑑賞・読み解くのも容易ではないが、これらを参考にして作詩することは非常に困難である。对句に挑戦するなんて無謀であるという声もありましたが会員の意

気は高く毎回十余名の対句の詩が寄せられている。四句全対格の作詩の提出者は皆はじめの作詩であることは疑いないが、曲がりなりに対句の形式になっている。上級者から見ればまったく対句になっていないとの評価かも知れない。しかし四句と言わず、起承の対句、転結の対句は会を進めるうちに徐々に対句の形式が整ってきたように思う。会員の作詩意欲には脱帽するところである。

これからもこの調子で勉強会を進めていく予定であり、テキストに従えば様々な対句形式が続々と掲載されており、詩力の向上を目指してゆく所存である。(川上修己)

「PC漢詩」現状報告

0歳の乳児から高齢の爺婆までスマホで遊ぶ時代となり、今年、世界ナンバーワンの囲碁棋士が囲碁AIに敗れるという画期的事件が起こりました。これまで人知もおよばぬと思われた領域でコンピューターが人間を凌駕する時代となりました。

この流れの中で、神漢連では、「PC漢詩」の名のもとに、漢詩で遊ぶ・学ぶためのパソコン、スマホの活用を検討する活動が始まりました。

パソコンと漢詩にかかわる関連情報の交換と活動の今後の進め方をテーマに、第一回情報交換会が九月四日、有志十七名の参加を得て開催されました。

現在インターネット上に見られる様々な漢詩関連情報をもとに、活動の目的・課題等につき幅広く、熱心な議論がなされ、その結果、漢詩普及・会員獲得活動という大目標を議論する前に、先ずは、メンバー各自が、一般に公開されている各種ツールを試用し、その使い勝手の良し悪しを体験して、我々自身がいやしく有効と思われるツールはいかにあるべきか、その条件について検討することからスタートすることとなりました。

当面は、三ヶ月一回の情報交換会を開催する予定です。神漢連会員ならどなたでも歓迎です。ご参加をお待ちしています。(瀧川智志)

バトル漢詩甲子園開催迫る

十六頁の行事予定参照

今回は三年ぶりの開催となり、講師も新たに河野光世先生にお願いしています。先生から頂いた詩題「西郊日暮」について参加十二のサークルから昨年末までに作品が提出されており、目下、各サークル内で他のサークルの作品について、バトルの論法が練られているところです。バトル終了後は、河野先生から作品の批評、バトル内容の妥当性を含めて、作詩の心構えのお話をお聞きする予定です。

優秀作品の表彰、場所を移しての懇親会も予定されています。サークル会員でない方も多数のご参加をお願いします。(高津有二)

「平成の漢詩あそび」出版!

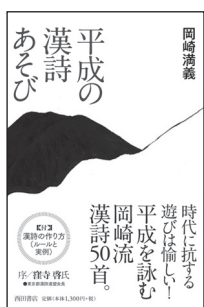
岡崎満義 著

岡崎満義前会長が、神奈川新聞の日曜版に平成二十四年四月から平成二十九年三月迄の五年間に五十回にわたり連載し好評を得た「漢詩への誘い(いざない)」が、「平成の漢詩あそび」と改名して一冊の本となり、西田書店(株)から出版されました。四六版、百五十二頁。神漢連から二〇〇円(実費)で頒布いたしますので、是非お求めください。尚、市中の本屋でも購入可能です。

「平成の漢詩あそび」は、「平成の同時代を共に生きていく人たち、有名無名にかかわりなく、私の心に響く生き方をした人たちを詩のかたちに残しておきたい」と著者が「まえがき」に述べているように、「撫子日本女子足球队」(ナadeshikoジャパン)から、著者の住まいの近くのカレー専門店のご夫婦まで、多種多様。五十首の七言絶句の漢詩と共に、各漢詩の説明も兼ねて書かれた著者のエッセーがまた素晴らしく、もうすぐ幕を閉じる「平成」の思い出になる一冊である。

「序文」は、窪寺啓生先生の心温まる文章である。尚、著者の「まえがき」と合わせて読むと、漢詩の師弟の厳しいながらも理想的な姿が浮かび上がる。また、本書の漢詩を、作詩を学ぶ者の観点から見ると、現代を詠うときの所謂「詩語」の宝庫であり、活用させて頂きたいと切に思う。

(香取和之)



蓮の花に籠める思い
—市川桃子先生講演会—

平成二十九年十二月六日(水)神奈川近代文学館に於いて、明海大学名誉教授の市川桃子先生による「蓮の花の運命」という講演会が開催された。会場は八十名を越す来場者で盛会であった。蓮に関する詩三十首を紹介され、休憩やミニ知識をさみ巧みなプロジェクト操作によって楽しく有意義な二時間でした。

先ずは北宋の李綱がハスを六人の美女にたとえた詩を紹介された。その美人とは西子・南威・洛神・湘妃・戚姬・蔡女である。最後の蔡女の句では蓮が痛んで寂しい情景を美しく感じている。何故恋の歌に蓮が出てくるのか、これは蓮のレンという発音が恋や憐と同じことに由来するようである。このような美意識を感じるようになったのはいつのころからであろうか？
これからその探検の旅に出かけるとする。
最初に到着したのは「詩経」の時代である。このころには荷と菡



菡という字が出てくる。次に「楚辞」の時代では荷や芙蓉という字が出てくるが、この時代までは美しいと鑑賞する作品はない、ハスには願いを成就する力、高貴性を表す力、仲立ちとなる力があると思われていた。

次に漢魏晋の時代に行ってみる。漢では靈帝の「招商歌」や、閔鴻の「芙蓉賦」があるが、吉瑞の植物や靈草という表現をしている。魏の曹植「芙蓉賦」や劉楨の「公讌詩」なども靈鳥、仁獸などととも吉慶の植物とされている。

六朝時代に入ると、東晋の陶潜の「雜詩十二首」の如く盛衰の比喻として現れる。又、宋の鮑照の「代白紵曲」では客観的な風景として枯れたハスが歌われる最初の作品となる。

次の齊の謝朓は「治宅」で寒々とした光景をより具体化するものとして衰荷を詠っている。梁の簡文帝を中心とする文学集団にも衰荷の趣が支持され詩的風景として定着した。

唐代に入っても、南北朝に発見された衰荷の景は、継承されてゆく。杜甫の「陪鄭公秋晚北池臨眺」では孤独感が表されており「曲江三章章五句之一」にも蕭条たる菱荷の景が出てくる。

盛唐の孟浩然「初出関旅亭夜坐懷王大校書」の中でハスの葉に落ちる雨の音を発見し、白居易・李商隱など後世の詩人に詠い継がれてゆく。

中唐では韋応物が「慈恩寺南池秋荷詠」に

於いてハスのかすかな香りを発見し、李商隱も「夜冷」で敗荷の余香を詠じている。又この時代には「芙蓉死す」という詩語が誕生し、張籍・李賀・孟郊・王建の詩中にある。

次に蓮の花と言えば「採蓮曲」が有名である。若い女性が小舟にのりハスの実を採る詩である。梁の武帝は樂府の「採蓮曲」を作った。唐代の李白による「採蓮曲」はフランス語やドイツ語にも訳されマラーの大地の曲第四章「美について」の歌曲にもなり、世界中の人に感銘を与えることになる。その詩を紹介する。

採蓮曲

李白

若那谿傍採蓮女 笑隔荷花共人語
日照新妝水底明 風飄香袂空中舉
岸上誰家遊冶郎 三三五五映垂楊
紫驪嘶入落花去 見此踟躕空斷腸

古代から現代まで蓮の花に籠める思いが連綿と受け継がれていることを知りました。市川桃子先生有り難うございました。

(水城まゆみ)



会員の活動

中国江南漢詩ツアー — 交流会・講演会・観光と盛沢山 —

今回のツアーは住田・古田両先生を筆頭に、九詩期会の他に好文会、八起会、十期会からも参加を得て総勢は十三名。昨年の十月二十五日出発、三十日帰国。漢詩のふるさとを訪ねるだけでなく、現地の漢詩愛好者と交流をしようという大きな目的があった。

交流会は旅の三日目、世界遺産「蘇州古典園林」の一つである蘇州最古の庭園「滄浪亭」の一室で「滄浪詩社蘇州詩詞協会」との間に行われた。



蘇州大学教授で昆劇の研究者である周秦滄浪詩社長と住田先生の挨拶及び相互の紹介からはじまって、十期会の中野さんの依頼により「前赤壁の



交流会の様子を古田先生は、次のように詠まれた。



賦」が中国語で朗詠されると、周秦氏はじめ、魏嘉瓚前詩社長など詩社の皆さんの朗詠が次々続いた。民謡のように音楽的で、そのう

えみなさん美声でよく声を通る。感動的で、当方は住田先生が詩吟を披露された後は、出番を失うくらいだった。

そして書家の王淵青氏の書、画家の顧逸氏の

の面の席上揮毫があり、これには九詩

期会の牛山さんが書を席上揮毫して

応えた。和気あいな

いの楽しい交歓会

で、このあと昼食も

近くの蘇州料理店

で一緒に楽しんだ。

交流会の様子を

古田先生は、次のよ

うに詠まれた。

滄浪亭中日詩社交流会 古田光子

姑蘇訪到度秋風 姑蘇訪ね到れば秋風度る

古雅江亭和氣充 古雅の江亭 和氣充ちたり

中日騷人親睦會 中日の騷人 親睦の會

吟詩揮筆興無窮 詩を吟じ筆を揮いて興窮り無し

蘇州大学の呉雨平教授の講演会は「同化と異化―日本漢詩と中国古典詩歌伝統」と題して大学の教室で行われた。

教授は、中国の漢詩では「志」を表すが、日本では「心」を表す。日本人は漢詩を「攝取醇化」して中国人の感性にはない独特の感情を表す「和臭」の漢詩を發展させたと話された。初心者との和臭ではなく、中国の漢詩とはまたひと味違う別の漢詩になっているという意味である。

講演終了後、住田先生が教室の黒板に次の詩を発表されると、教授以

下中国人の学生も感心しきりであった。

蘇州丁酉重陽

住田笛雄

逆旅庭前蘇國秋
清光仰視獨閑遊
重陽佳夜半月天
遙憶故園君見不

逆旅の庭前蘇國の秋
清光仰ぎ視て 独り閑遊
重陽の佳夜 半月の月
遙かに故園を憶う 君見るや不

観光では上海の豫園や杭州の靈隱寺、西湖、水郷の烏鎮などを訪ね、寒山寺では八起会の長岡さんの指揮の下、詩碑の前で全員で「楓橋夜泊」を吟詠して中国人観光客の注目を浴びた。

最後に台風二十二号のおかげで帰りの飛行機が欠航となり、急遽空港近くの小さなホテルに泊まるというアクシデントもあった。国際電話がかけられず、夜には英語のわかる職員がいなくなるというホテルだったが、中国語のできる古田先生と好文会の埴原さんに頑張ってもらった。おかげで思いがけず安くおいしい料理を食べることもできた。

一行十三人が助けあって無事楽しく日程を終え、所期の目的も達成す



ることができ、いい旅でした。これもみな日中協会をはじめとする皆さんのご協力のおかげです。連盟からお土産用にいただいた静夜思トートバッグはとても好評でした。深く感謝します。

(九詩期会のHP(神漢連HPからリンクあり)には江南漢詩ツアーの写真や動画を掲載しています。どうぞご覧ください。)

(山口幸雄)



小田原清閑亭での漢詩吟詠会

恒例になった、清閑亭観月漢詩吟詠会がNPO法人小田原まちづくり応援団と神漢連の詩游会との共催で昨秋の九月三十日に小田原の旧黒田長成侯爵別邸に於いて行われた。今回は生誕百五十年「夏目漱石と黒田長成侯爵の漢詩を詠う」というタイトルで行われ、長成侯爵の漢詩十首と漱石の漢詩十三首が朗詠された。

司会者による朗詠漢詩の紹介とその朗読に引き続き、吟詠が行われた。吟詠者は当会の住田

笛雄、横溝比呂美、内山義弘の各先生方をお願いした。また漢詩の中国語による朗読には日中友好協会の陣愛樺さんの協力による美声を聞くこともできた。更に漱石の漢詩に関するエッセイ「思い出す事など」の第五章他の朗読を室橋幸子先生にお願した。

また新しい試みとして、書道吟を行い、黒田侯爵の「路上偶作」と漱石の「無題」について、漢詩の吟詠に合わせて室橋先生の筆により催行された。

参加者は詩游会員と神漢連、それに小田原近郊の方々を合わせて六十余名が参加し、盛会の裡に終了した。

また同時期に十五日間にわたり、清閑亭蔵ギャラリーに於いて吟詠詩の展示も行われ千五百人余の来場者があったと聞いている。

(川上修己)



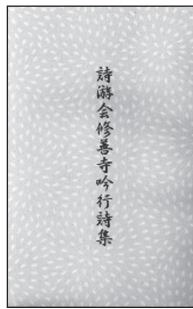
詩游会の漢詩創作活動

同人詩集発行

詩游会では平成二十二年度の発足以来、日頃の詩作をまとめて、小冊子にしてきた。

昨年発足九五年を記念して「詩游会漢詩集」(百二十四頁)を手作業で製本、二百部を配布。巻末に結成以来の活動記録を添えており、会員のそれぞれの歩みを確認できる縁(よすが)にもなっている。また、恒例の宿泊吟行会の作品を吟行詩集として少数部、ほぼ毎年発行している。

今年度は漱石ゆかりの伊豆修善寺「菊屋」と大患当時の足跡をテーマに「修善寺吟行詩集」(五十四頁。カラー写真)に纏めることができた。この巻頭には(故)田原先生の次の遺作が旅の写真と共に載っており、各自の思いを又、特別なものとしている。



(新井治仁)

漱石聞鵬

田原健一

山齊霧杳閑書迷
篋裏子規啼嘯嘯
措筆曹然歛耳聽
亡朋到否自悽悽

山齋霧杳として書を閑するに迷う
篋裏子規啼嘯嘯の啼
筆を描いて曹然耳を歛て聴く
亡朋到りしや否や自ずから悽悽

漢詩カレンダー製作に携わって

詩游会では会員と講師の先生とで、自詠の漢詩暦を作り今年で三作目となります。各人が希望の月を選び漢詩を一首作り、その漢詩に合った写真を持ち寄ります。

初回時は暦の部分、漢詩と写真との配置など全て手作りで苦勞しました。しかし昨年度から漢詩と写真との紙面構成を当方で製作、暦の部分と印刷製本は専門業者に依頼して、完成度の高い作品となりました。

一番のポイントは漢詩と季節感のある写真との組み合わせで、両方にマッチした写真の無いときは大変苦勞します。以前撮影した写真から探したり、現場に行つて撮影して来る事もありました。明るいイメージの季節に合った写真を確保して完成することが出来て安堵しています。

初心者入門講座受講時の自己紹介の席で、「自分の詠んだ漢詩でカレンダーを作りたい」と希望を話した事を念頭に、二十六年に鎌倉を二十七年に横浜の四季を詠んだ六詩で六枚綴の自分のカレンダーを作りました。これが「詩游会漢詩暦」

の製作に繋がった事に感慨深いものがあります。

(横溝喜久男)



鎌倉漢詩会 第二回作品展

平成二十九年十一月三日より三日間、

鎌倉漢詩会(磯野衛孝先生主宰)会員の漢詩作品二十五点を、鎌倉市民文化祭への参加として、鎌倉生涯学習センターにおいて展示した。



作品はすべて七言絶句、見易いように墨書して掛軸や額装とし、活字による読み下し文を添付した。ご来場者は総数百二十余名と盛況だった。

一、作品のテーマは各自一点を題詠「鎌倉を詠む」とし、もう一点を自由題とした。題詠では鎌倉らしく杜寺を詠う詩が多かった。自由題では叙景歌や歴史懐古が多かった。

二、最近話題の自詠自書については、会員十二名のうち四名が文字通りの自書であったが、他の八名も、鎌倉漢詩会会員による揮毫であり、広い意味では自詠自書であったと言える。

三、読み下し文と難解の用語の解釈を記した附箋を添えた。(鈴木栄次)

会員だより

「牛の歩みの如くの口今です」

九詩期会 平賀康雄

はるか以前、祖父やその友人諸氏等、ごく近くに漢詩に造詣の深い人達がおり、青年時代の頃から「いつかは自分も漢詩を・・・」との思いでおりました。ところが、ほかに縁あつて入った茶の湯や英語サークルなどに長々時間をかまけているうち、最早六十代も後半となつてしまいました。

遅まきながら、たまたま神奈川漢詩連盟の平成二十七年初心者講座を受講する機会を得て、連盟の一員に加えさせていただき、素晴らしい先生方や先輩方のご縁を賜わる事となり、有り難く思っております。とは言え、今まで中国の歴史や伝統文化には多少関心がありながらも、何しろ漢文、漢詩の素養、下地が出来ていないため、詩作にはいつも難渋し、牛の歩みの域を出ない現状です。最近「漢詩名作集成」、「漢詩一日一首」等の中国、日本の名作集他、旧知の先輩方の詩文集等なるべく多くの名詩を日々繙いて、漢語の語彙や用法等を習得するよう心掛けております。今のところ主務である僧侶としての仕事の他、いくつかの公けの仕事も抱える中、時間

をやり繰りしても、それぞれの場所に赴くのは、実はこれがストレスになるどころか、逆にモチベーションの維持、向上に資していると確信するからです。漢詩に於いても、産みの苦しみの後、出来上がった喜びは（拙作と言えど）他に例えようがありません。

漢詩鑑賞会Aと私

佐藤恵子

「王維は姿かたちが美しく、詩を作り絵を描き、その上音楽にも秀で、才能があふれていたものだから、あちこちでもはやされたのですなあ。」

と、漢詩鑑賞会Aの講師玉井幸久先生は感に堪えない面持ちで話されます。耳を傾けていると自然に王維という詩人のイメージが広がり、いつの間にか唐の時代へ向かってタイムマシンに乗っています。一体詩人はどんな家に住んで、どのような服をきて何を食べ又どんな楽器を奏でたのだろうか、知りたい事柄が次から次へと湧き出します。

それに答えるかのように玉井先生は詩人の親兄弟友人知人の話から始まり、典故を遡り漢の時代へ飛び、また関連する多くの詩人の漢詩や故実、政争、植物などあらゆる方面におよび縦横無尽に動きまわります。時には長安の平面図や五岳の高さなど、その説明はとても詳細です。

私は居ながらにして唐の都を見物し、興味は増すばかり。漢詩のみならず、中国の文化そのものに対する理解が深まって行くのをまさに感じられるひと時です。

中国全般にわたって、毎回新しい発見のある漢詩鑑賞会Aへ出かけるのを楽しみにしている次第です。

（編集者注）佐藤さんは漢詩鑑賞に興味があり、神漢連に入会された方です。

漢詩の一冊

大森冽子

「漢詩を読む」 平凡社 全四冊

- 一. 詩経、屈原から陶淵明へ
- 二. 謝靈運から李白、杜甫へ
- 三. 白居易から蘇東坡へ
- 四. 陸游から魯迅へ

漢詩集は通常、漢詩白文、読下し、語釈、及び通釈からなっており、そしてやたらと多数の漢詩が並んでいる。その中で、語釈・通釈はその詩の鑑賞を手助けするものとの位置づけである。しかし、初心者にとっては、その詩の素晴らしさがどこにあるのか、その詩が生れた時代背景はどういうものなのか、どのように鑑賞すればいいのか等、基本的なことが分からない。

この本はこのような漢詩初心者の悩みを一

挙に解決してくれ、漢詩に親しみを覚える優れた漢詩鑑賞の一冊である。本の構成としては、詩経から魯人まで中国を代表する詩人の漢詩について、時代順に各詩を白文と読下しで記し、宇野直人と江原正士が対談方式で、各詩にまつわる時代背景、故事の説明、詩人の性格・気質まで述べ合っている。宇野直人は多面的切り口で詩人の知られざる一面を解き明かし、対する江原正士は俳優で漢詩に並々ならぬ造詣を持っており、二人の息の合った対話に思わず頷いたり、にやりとしてしまうことしばしばである。



例えば孟浩然の春暁 「春眠不觉晓 处处聞啼鳥 夜来風雨声 花落知多少」では 宇 「二見のんびり春を楽しんでいるような詩です。」

江 「悟ったというよりは、まあ情景描写ですね。何か意味合いがあるんでしょうか。」

宇 「朝寝坊ができるというのは、官職についていないという告白になるんです。」

江 「当時のお役人はずいぶん朝早くから勤めに出るんですね。」

宇 「まだ星の見えるうちから宮中の門の前

に待っていないくはいけませんでした。」

江 「ウチでぐーたらしているということですか？」

宇 「風雨は『詩経』以来、逆境のたとえで私の人生、今まで雨風続きで暗かった」と。

江 「すると武士が「春眠暁を覚えず」と格好よく言ってるさまではないわけですね。」

まるで話を聞いているかのようにいつの間にか詩の理解が深まっていくのです。

第一回漢詩指導者養成研修会に参加
神漢連会長 三村公二

全日本漢詩連盟の理事会などで多くの地区漢詩団体から「漢詩普及の為に詩作指導者の育成が不可欠」という強い要請があり、それに応える形で第一回漢詩指導者研修会が、湯島聖堂斯文会館会議室で、八月三日〜四日に開催された。

講師は石川忠久先生と鷺野正明先生のお二人で、受講者は全日本漢詩大会で入選・入賞経歴があるという前提で各地区漢詩団体から推薦された十一名の方々であった。

講義は先ず石川先生の次の二つの話から始まった。

一、夏目漱石を例にとり、七言絶句から始めて、五言絶句に至る詩作階梯の紹介

二、先生の著書「漢詩の稽古」を使って詩語の選び方の重要性などの講義

次いで、鷺野先生から、次の順序で受講者の実習を含む講義があった。

- 一、私の作詩指導の実践
- 二、漢詩の基本規則
- 三、七言絶句の正格と拗救・冒韻について
- 四、詩を与えて受講者に鑑賞させる・詩を与えて受講者に添削させる
- 五、受講者が作詩、お互いに添削

紙面の関係もあり逐一詳細にご紹介できないが、私にとっての一番の収穫は、鷺野先生提唱の「私の作詩指導の実践」が神漢連の入門講座で既に実施している講義の内容とほぼ同じで我々は間違った教育はしていなかったと確認出来た事である。

研修会終了後、「修了書」を頂いたが、わずか二日の研修で指導者としての資格、実力が身についたとは思わない。添削の実践、漢詩の背景に関する基本知識などの更なる研修指導を受けて初めて真の指導者になれるのだと思っている。全漢連では新しいメンバーを集めて第二回の研修会をやる予定があると聞いているが、第一回受講者へのフォローも考慮願いたいと意見具申している。今回は状況把握の意味もあって私が参加したが、第二回以降は適任者に順番に受講して頂く予定になっている。



漢詩と私

中島龍一



「ベンセイシユクシユク」という発音は小学生のころから耳にしていた。周りの大人がよく言っていたからですが、何のことか分からないまま年月が過ぎ意味が分かっていたのは五十歳の頃、歴史の本に漢詩が載っていたからである。

鞭声肅肅夜過河 曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍 流星光底逸長蛇

ベンは馬の鞭だった。この漢詩が武田信玄と上杉謙信による川中島の戦いを詠じていることを初めて知り、この時から漢詩は良いものだという意識を持つようになった。しかも結句の 流星光底逸長蛇 の七字目は信玄が巳年生まれなので、虎でも龍でもなく蛇なのだ。知り、信玄の生年千五百二十一年を調べてみると確かにそのとおり巳年であった。作者の頼山陽は江戸時代の二百五十年前の事実をここまで調べて漢詩を作っていたのかと恐れ入った次第であった。

若いころ、鉄鋼会社の技術者として溶鉱炉

で鉄を製造していた。高度経済成長の初めの頃で、作れば売れる時代であったから増産と品質向上が最大の課題でさまざまな実験と研究に没頭していた。したがって残業も極めて多かった。また単身赴任は二回にわたり十数年間あったが、この時には読書は海外サスペンス、歴史小説(時代小説とは別です)に特化していて、漱石や李白とは全く縁がなかった。

仕事での資料作りも殆ど技術に関する表やグラフと数字を駆使していた。この反動で文学や詩という抽象的、感傷的な分野に憧れがあったかもしれない。

定年後三年間ほどぶらぶらして、六十八歳のとき漢詩初心者入門講座の応募に申込み、作詩のルールを教わって実作と鑑賞を始め、それから二年たったころ、薦められて横浜の朝日カルチャー漢詩教室に出席させてもらった。

一年目は七言絶句を作ること、苦しみと多少のうれしさを感じたが、二年目になると、良い詩とは何なのか悩み始めた。このころ言われた言葉は「規模の大きな風景・事実は二十八文字では描き切れない、風景を絞れ」「自己満足する前に、他者がその句に共感が持てるかが創作の大前提だ」、「見え透いた理念は詩に非ず」、「すべてを説明するのは詩的でない」などなど。

鑑賞もしなければと本も読んだが、なかなか良い詩がどれなのか理解できない。しかし

何度か同じ本を繰り返して読むと段々と分かってくるようになり、そこに喜びを感じてくる。鑑賞も実作も漢詩を楽しめるようになるには、ある程度、理解が上達しなければできないということらしい。

特に心に残っている言葉は、以前に神奈川清韻にも書いたが、詩というものは「一読して飛躍の爽快さを感じることである、簡潔と飛躍が漢詩である、簡潔の裏には熟慮を蔵しなければ飛躍にならない」(吉川幸次郎)

「大切なのは、普通の語で非凡なことを言うのである」(シヨウペンハウエル)

「私は詞を作るとき、書くことと書かないことをまず決める」(作詞家松本隆)

「詩は、なにか目立つもの、なにか人の気付かない視点を見出せば勝ち」(石川忠久) などである。

これらは表現は異なるがほぼ同じことを言っているように感じられる。詩は調査報告書や新聞記事とは違うのであり、芸術作品なのである。読む人が心に感ずるかどうかということなのである。(俳句や短歌も然りでしょう)

しかし、これらの言葉を理解しても、いつまでたっても創作に効果が表れないのが現状である。それはそれで自己不満足しながらも、末永く気楽に漢詩と接して行きたいと思っています。

神漢連会員「全国漢詩大会」で大活躍

(通常のPCで対応できない旧漢字は常用漢字を用いています。)

平成二十九年度 全日本漢詩大会愛知大会

大本山總持寺賞

犬山城下鵜飼

犬山城下の鵜飼

川上 修己

瞻仰古城雲靜流

瞻仰す古城 雲靜かに流れ

蘇江汎汎遠陵丘

蘇江汎々として 陵丘を遶る

月潭篝火漁翁影

月潭の篝火 漁翁の影

澆刺香魚躍客舟

澆刺たる香魚 客舟に躍る

愛知大会の受賞に憶う

平成二十九年度の全日本漢詩大会が昨秋の十月十四日(土)に名古屋城近くの愛知学院大学名城キャンパスで行われた。この大会の詩題は日本の「城」であり、日本には国宝の城から名の知れない城壘・城跡など非常に多く存在している。詩としてこれらの多くの中から何を詠ずるかが苦心する所であった。城とその歴史的背景は付き物であり、受賞作品の多くは城とその歴史とを結びつけている。しかし、今回受賞した私の作品はこの歴史的背景を避けてみた。詩題のように国宝犬山城と城下の鵜飼いに着目した。この視点が受賞に功を奏したかも知れない。

犬山城はかつて二回訪ねたことがある。国宝の小さな城が木曾川のとりに立っている。鵜飼いはこの木曾川でも行われているが、ここでなく長良川で経験したことがある。この経験が作詩に役立っていることは言うまでもない。

起句は遠望の城の風景であり、承句はこれを取り巻く木曾川(蘇江)の景色である。転句は夕闇の鵜飼いの様子を詠い、結句は鵜が捕らえた鮎が船上で跳ねている様子である。詩の神髄である結句では誰も悩むところでありやはり一番苦労したところである。鵜飼いの実景を転句結句で説明の句でないようにしかも起句承句とつながりの表現が困難であった。この二句は詩情が表現できたように思う。今回の特別賞に選出されたことは青天の霹靂であり望外の喜びであった。



佳作

今歸仁城懷古

今歸仁城懷古

池上 一利

南海潮平摩夏天

南海潮平かに 夏天に摩す

舊壕故壘碧苔穿

旧壕 故壘 碧苔穿つ

群雄遺恨今安在

群雄の遺恨 今安くに在りや

鬼哭啾啾榕樹邊

鬼哭啾々たり 榕樹の辺

入選

莞上大魚躍

莞の上に大魚は躍る

岡田 泰男

諸侯霸業思聯綿

諸侯の霸業 思ひ聯綿

虎踞龍蟠三百年

虎踞龍蟠の三百年

鐵馬金城經劍戟

鉄馬 金城 劍戟を経て

偉容歴歴尾州天

偉容歴々たり 尾州の天

香取 和之

會津若松城懷古

會津若松城懷古

朱甍白壁昔年粧

朱甍 白壁 昔年の装い

遙憶戊辰應斷腸

遙に戊辰を憶えば 応に断腸

血淚戰塵苔壘下

血淚 戰塵 苔壘の下

縱爲朝敵守家郷

縦に朝敵と為るといへども家郷を守らん

齋藤 護

憶古城

古城を憶う

遺恨當年不可言

遺恨 當年 言う可からず

興亡霸業已無痕

興亡 霸業 已に痕無し

英雄詠得能州景

英雄 詠み得たる 能州の景

重疊山河猶自存

重疊と 山河猶自存す

城田 六郎

小田原城懐古

小田原城懐古

關左封侯五代榮

關左の封侯 五代榮えるも

豊公奇計拔金城

豊公の奇計 金城を抜く

連綿語繼興亡事

連綿として語り継ぐ 興亡の事

一炷誰猶奠古塋

一炷 誰か猶お古塋に奠す

杉森千枝美

新柳

新柳

御溝堤上景風晨

御溝の堤上 景風の晨

垂柳鵝黃雨後新

垂柳の鵝黄 雨後新たなり

細細千條輕拂水

細々たる千条 軽く水を払ひ

翠青不日舞陽春

翠青 日ならずして 陽春に舞はん



第二十回全国ふるさと漢詩コンテスト

優秀賞

春日野遊

春日野遊

櫻花花信出門之

桜花の花信に門を出でて之けは

東野風吹紅影奇

東野に風吹いて紅影奇なり

樹下坐筵能養老

樹下筵に坐し能く老を養う

論詩謙酌日遲遲

詩を論じ謙酌し日は遅々たり

住田 笛雄

入選

城田 六郎

屋久島繩文杉

屋久島の繩文杉

洋上青螺樹鬱蒼

洋上の青螺 樹鬱蒼

不逢斧鉞幾星霜

斧鉞に逢わざること幾星霜

瘤根盤地十圍幹

瘤根地に盤る十圍の幹

尖杪凜乎如劍鋌

尖杪凜乎として劍鋌の如し

杉森千枝美

過舊廬

旧廬に過る

廢井苔階蟲語滋

廢井の苔階 虫語滋し

西風搖動碧梧枝

西風揺動す碧梧の枝

簷前墜葉無人掃

簷前の墜葉 人の掃く無く

白露荒庭橘柚垂

白露の荒庭 橘柚垂る



第二回漱石記念漢詩大会・熊本

佳作

宏村偶成

宏村偶成

白壁連延水上村

白壁連延 水上の村

垂楊湖畔綠陰繁

垂楊の湖畔 綠陰繁し

老翁獨坐薰風下

老翁 独り坐す 薰風の下

只聽清流響小軒

只だ清流の小軒に響くを聴く

上田 尤子

牛山 知彦

金港驟雨

金港驟雨

吹起烈風揚素波

吹き起る烈風 素波を揚ぐ

白鷗去盡黑雲過

白鷗 去り尽して 黒雲過る

雷聲殷殷須臾雨

雷声殷殷 須臾の雨

天霽港邊船影多

天霽れて 港辺 船影多し

小嶋明紀子

尋道士山居

道士の山居を尋ぬ

欲訪幽居穿薜蘿

幽居を訪はんと欲して薜蘿を穿つ

松崖十丈谷風斜

松崖 十丈 谷風斜めなり

白雲生處見何物

白雲生ずる処 何物かを見る

君鍊丹砂餐碧霞

君 丹砂を鍊つて 碧霞を餐す

入選

住田 笛雄

旅窗曉月

旅窓の曉月

落月窺窗山桂芬

落月 窓を窺つて 山桂芬たり

一聲啼血醉中間

一声の啼血 醉中に聞く

南風吹夢歸心切

南風 夢を吹いて 帰心切なり

渭樹江雲遙想君

渭樹 江雲 遙かに君を想ふ

室橋 幸子

夏日書懷

夏日書懷

亂蟬聒聒火雲昌

乱蟬 聒聒 火雲昌なり

竹擲汗衫殘照長

竹擲 汗衫 殘照長し

懶惰奈何還自笑

懶惰 奈何ぞ 還た自ら笑ふ

一杯冷酒一時涼

一杯の冷酒 一時の涼

第九回諸橋轍次博士記念漢詩大会

最優秀賞・諸橋轍次賞

尺蠖

尺蠖 せきかく

芝 公男

燕子頻來桑葉搖 燕子頻りに来りて 桑葉揺るる
見危尺蠖化蕭條 危うきを見て 尺蠖 蕭條と化す
暫須無事顯姿體 暫く事なきを須ちて 姿体を顕し
欲進屈身為拱橋 進まんと欲し身を屈め拱橋を為す

今回の受賞は三年間にわたる住田・中島両先生のご指導と八起会の仲間との勉強、研修会の出席の方々との研鑽の賜物です。

受賞作の情景は養蚕の多い農村育ちで子供の頃より日常的で、燕が飛交い桑畑が点在しており、尺取虫もよく見ました。日本では俳句などで軽く詠まれている虫も、中国の先人は易経の「蠖屈」の言葉のように哲理をみていることに感動し、作詩の動機となりました。戴いた賞の名に恥じないよう研鑽に励みます。

奨励賞・新潟日報社賞

大江清夜

大江清夜

香取 和之

滾滾大江涼氣流 滾々たる大江 涼氣流る
潭淵解纜一扁舟 潭淵 纜を解く 一扁舟
月光映水金波湧 月光 水に映じ 金波湧く
星漢熒熒歲月悠 星漢 熒々 歲月悠なり

奨励賞・エヌ・シイ・ティ賞

上田 尤子

清澄庭園紅葉

清澄庭園紅葉

清澄池水映楓鮮 清澄の池水 楓に映じて鮮やかなり
落葉翩翩泛岸邊 落葉翩翩 岸辺に泛ぶ
離國數年偏憶舊 国を離れて數年 偏に旧を憶う
風光恰似故園天 風光 恰も似たり 故園の天

秀作賞

住田 笛雄

慶賀合辦事業盛行

合弁事業の盛行を慶賀す

共興工廠已多年

共に工廠を興して 已に多年

勤恪丁男及數千

勤恪の丁男 數千に及ぶ

言即實行行即達

言即実行 行えば即ち達す

日中協力友情全

日中協力 友情全し

柴本 信子

除夜書懷

除夜書懷

歲月滔滔似逝川

歲月滔滔として 逝く川に似て

浮生泛泛夢中遷

浮生泛々として 夢中に遷る

寒窓獨看六花發

寒窓に独り看る 六花発くを

百八鐘聲復送年

百八鐘聲 復た年を送るなり



平成三十年の全国漢詩大会の予定

奮って応募しよう!

詳細は、グーグル等で各大会を「検索」。

漢詩応募規定・用紙は、各大会のホームページからも入手できます。

●平成三十年度全日本漢詩大会・全日本漢詩連盟設立十五周年記念大会

九月八日・九日 東京

詩題 「江・河・川にかかわるもの」、自由題も可

●平成三十年度全日本漢詩連盟「扶桑風韻」漢詩大会

詩題 「家・屋にかかわるもの」、自由題も可

●平成三十年度全日本漢詩連盟「扶桑風韻」漢詩大会

詩題 「家・屋にかかわるもの」、自由題も可

●第二十一回全国ふるさと漢詩コンテスト

詩題と応募期間は、三月頃決定予定。

●第三回漱石漢詩記念漢詩大会

十二月一日 熊本市

●第十回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月九・十日(予定) 三条市

●第九回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月九・十日(予定) 三条市

●第八回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月九・十日(予定) 三条市

●第七回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月九・十日(予定) 三条市

●第六回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月九・十日(予定) 三条市

●第五回諸橋轍次博士記念漢詩大会

十一月九・十日(予定) 三条市

神奈川県漢詩連盟 今年の行事予定

●第五回サークル交流会(バトル漢詩甲子園、五頁記事参照)

期 日 平成三十年三月二十九日(木)
 時 間 午後一時三〇分～四時三〇分(バトル・講義) / 五時～六時三〇分(懇親会)
 場 所 神奈川近代文学館(バトル・講義) / KKRポートヒル横浜(懇親会)
 参加申込 バトル・講義は申込不要。尚、懇親会は本会報に同封した振込用紙にて二月末(入金)まで。
 ☆サークルに在籍されない会員も奮ってご参加下さい。

●初心者入門講座 漢詩の鑑賞と実作 (第十二期生)

全五回の講義と実習 ①四月二十日(金) ②四月二十五日(水) ③五月十日(木)
 ④五月二十四日(木) ⑤六月六日(水)
 神奈川近代文学館にて 午後一時より四時

●総会・講演会・懇親会

期 日 平成三十年五月三十日(水)
 時 間 午後一時～四時三〇分(総会・講演会) / 五時～六時三〇分(懇親会)
 場 所 神奈川近代文学館(総会・講演会) / KKRポートヒル横浜(懇親会)
 総会議題 平成二十九年事業報告、平成三十年活動計画、他
 講演会 石川忠久先生 演題未定
 出 席 開催案内(四月初旬発送)に同封される返信はがきにて四月末まで投函。
 懇親会も出席の方は同封の振込用紙で年会費と一緒に振込み願います。

●吟行会

秋の予定、詳細は次号二十三号にて

●研修会

秋の予定、詳細は次号二十三号にて

●平成三十年度全日本漢詩大会・全日本漢詩連盟設立十五周年記念大会

平成三十年九月八日(土)・九日(日)
 (千葉県・東京都・神奈川県漢詩連盟共同開催)

編集後記

漢詩神奈川の編集メンバーが新たにになり、本会報二十二号からは、香取和之、大森冽子、牛山知彦の三名が担当することになりました。宜しくお願い申し上げます。

平成十八年十二月の創刊号より九号迄、お一人で担当された(故)田原健一前副会長が、「神奈川県漢詩連盟の十年の歩み」(平成二十八年八月発行)に次のように書かれている。

「絶えず念頭にあったことは、会報でしか繋がっていない会員の存在であった。そういう一般会員の方に漢詩への関心を少しでも呼び覚まし、そこにどう連盟を意識させるかであった。」これは、会報編集メンバーにとって永遠の課題だが、以下の編集方針で臨みたいと考えている。

- ・誌面を、会長の挨拶・方針、連盟の行事、会員の活動、会員日より、全国大会での入賞詩、の五つに大きく分けて読み易くする。
- ・漢詩サークルなど会員グループの活動を積極的に紹介する。

- ・漢詩作法・鑑賞力向上への手助けとなる情報を提供する。漢詩関係の図書紹介、先人の漢詩への取組み、全国漢詩大会の情報等。尚、今後の紙面向上の為、読後感想やご意見等、左記の香取メールアドレス迄ご連絡いただければ幸いである。

katorikazuyuki@gmail.com (香取、大森、牛山)
 (注)十一頁、十二頁の押絵は、田原氏作を使用。